

『永遠のいのちへの水』 ヨハネの福音書 4 章 1～15 節

1. ヤコブの井戸にて

本日から4章に入ります。4章の舞台は、42節を境として前半がサマリア、後半がガリラヤです。場所についていえば、カナの結婚式の記事からはみなユダヤでの出来事でした。他の福音書は、ガリラヤでのイエス様の活動を描くのと対照的です。前半の冒頭は、パリサイ人がイエス様の弟子の増加を耳にしたことがきっかけで、イエス様は、ユダヤを去ることになったと述べています。でもガリラヤへの帰途に、イエス様はあえてユダヤ人に嫌われていたサマリアを通られ、ご自身が救い主であることを示されました。

「サマリアの女」の話は、1～42節まで続いています。今日は、その最初の部分1～15節を学んでいきます。

過越しの祭りをエルサレムで過ごしておられたイエス様は、その後しばらく、ユダヤ地方に滞在し、そこでバプテスマを授けておられましたが、イエス様がヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けているということがパリサイ人の耳に入ったとき、ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれました。なぜそのことが問題だったのかというと、イエス様の奉仕の方がバプテスマのヨハネのそれよりも影響力を増したために、パリサイ人の関心と敵意が、今やバプテスマのヨハネからイエス様に向けられていたことを意味していたからです。それはイエス様が彼らを恐れていたということではありません。まだその時ではなかったということです。その時とは、イエス様の時です。イエス様が十字架にかかって死なれる時はまだ来ていませんでした。それでイエス様は、ユダヤを去って再びガリラヤへ向かわれたのです。

この箇所を中心となるのは、13～14節です。そこにイエス様は「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」と言われました。この言葉が語られたのは、5～6節に「それでイエスは、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、スカルというサマリアの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた。時はおよそ第六の時であった。」とあるように、スカルというサマリアの町の近くの、ヤコブの井戸のところ。「井戸」というと私たちは、狭い縦穴が垂直に深く掘られていて、その底に湧いている水をポンプで吸い上げるか、昔であれば釣瓶を落として縄で引き上げて水を汲む場所を思い浮かべます。詳訳聖書ですと「ヤコブの泉(井戸)」となっています。14節に「泉」という言葉がありましたが、それとこの「井戸」は同じ言葉なのです。ですからこの「ヤコブの井戸」は、町中の中にある「井戸」ではなく、町の外にある「泉」であり、人々は毎日町を出てそこに水を汲みに来たのです。当時の人々の生活は、今日の私たちのように、水道の蛇口をひねれば清潔な水がふんだんに出るというものでは勿論なかったわけで、生活のための水はこの「泉」に汲みに来て、水がめに汲んで家まで持ち帰らなければなりません。この「泉」がスカルの町からどれくらい離れていたのかは分かりませんが、8節には、「弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。」とありますし、28節には、「彼女は、自分の水がめに置いたまま町へ行き、人々に言った。」ともあります。スカルの町とこの「泉」との間には一定の距離があったことが分かります。このヤコブの「泉」のほりで、そこに水を汲みに来た一人の女性とイエス様とが出会い、そこで語られたのがこの13～14節の言葉だったのです。

イエス様がここへ来られたのは、名もない、一人の女性を救いに導くために、イエス様は、初めから、そのように計画しておられたのです。私たちも、それが自分の考えや計画と違って、神の御心ならば、それを变える柔軟さが求められます。それはイエス様のように、自分に与えられている神の使命を知り、そこに生きることから与えられるのです。いつも神の御心は何か、何が良いことで神に受け入れられることなのかを求め、その使命に生きる者でありたいと願われます。

2. 渴くことのない水

さて、時はおよそ第六の時でした。これはユダヤの時刻のことで、現在の時刻で言うと、正午ごろとなります。つ

まり、太陽が最も高く上る時間です。イスラエルのこの時間は砂の上で卵が焼けるほど暑いと言われていて、人々は、大抵外へ出ずに家の中でゆっくりと過ごすのが習慣となっていました。そんな時間に、ひとりのサマリアの女が、水を汲みに来たのです。いったいなぜ彼女はこんな時間に水を汲みにやって来たのでしょうか。通常は朝夕の涼しい時間帯に水を汲み終えるのが当然ですから、人目を避けて水を汲みにやって来たこの女性には、何らかの事情があったことがわかります。その事情とはどんなことだったのでしょうか？それは、他人に会いたくなかったということです。

13 節でイエス様は、「**この水を飲む人はみな、また渴きます。**」と言いました。かなりの時間をかけて、苦労して「泉」から汲んで持ち帰った水は、飲む者の渴きを一時癒しますが、しかし、しばらくすればまた喉は渴きます。人は生きるために水を飲まなければなりません。しかし水はとても重いものですから、一度にそうたくさん汲んで来ることはできません。だからじきになくなり、また「泉」へ汲みに行かなければならないのです。水道のある生活に慣れている私たちには想像もできないような苦労が、昔の人々の生活にはあったのです。そのことを意識しておかないと、14 節のイエス様の言葉の意味を正しくとらえることはできないでしょう。

イエス様は「**しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。**」と言われました。イエス様が与えて下さる水は、その人の内で「泉」となるのです。つまり新鮮な水がこんこんと湧き出る「泉」が自分の内に出来るのです。その水によっていつも新たに潤され、渴きを癒されるのですイエス様のこの言葉を聞いてこのサマリアの女性は「**主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。**」と願いました。そういう「泉」が自分の中にあれば、もう遠くの「泉」へ水を汲みに行く必要がなくなる、と思ったのです。つい最近も伊東市で断水がありました。水を汲みに行く必要がなくなるのがどんなに有り難いことであるかを、そのような経験した一部のの人にしか分からなくなっています。しかしこの当時は、誰もが日常的に、水の確保の大変さを感じていたのです。

15 節で彼女はイエス様に「**主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。**」と願ったわけですが、イエス様とこの女性との最初の出会いにおいては、7 節に語られているように、イエス様の方が彼女に「**わたしに水を飲ませてください**」と願っておられたのです。イエス様のこの一言から、この女性とイエス様の会話が始まりました。その会話の中で、いつか立場が逆転して、彼女がイエス様に「**その水を私に下さい**」と願うようになったのです。これはとても面白いことだと思いませんか。ここでいったい何が起ったのでしょうか。

3. サマリアのスカル

イエス様はこの時、旅をしておられました。3～4 節にそのことが語られています。「**ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた。しかし、サマリアを通過して行かなければならなかった。**」とあります。イエス様はユダヤからガリラヤへ行かれました。当時、パレスチナは南のユダと北のガリラヤの間にサマリアという地方があって、ユダヤからガリラヤの間を往来する時には、そこを通らず、わざわざヨルダン川を渡って、ヨルダン川に沿って北上しました。もっとも急ぎの用の方は、サマリアを通過して行く人もいないわけではありませんでしたが、この少し後の所に、「**ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。**」とあるように、普通ユダヤ人たちは、その道を通ることはほとんどありませんでした。ですから、「**ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。**」というのは、単に急ぎの用事があったからではなく、もっとほかの理由があったからなのです。

それはいったいどのような理由だったのでしょうか。それは5 節にあるように、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、スカルというサマリアの町に来るためでした。ヤコブは主なる神から「イスラエル」という名を与えられた人であり、彼の子どもたちからイスラエルの十二の部族が興りました。ヨセフはヤコブの子ですが、このヨセフだけは、「ヨセフ族」とはならず、ヨセフの二人の子どもたち、マナセとエフライムがそれぞれ一つの部族となりました。つまり「**ヤコブがその子ヨセフに与えた地所**」というのは、マナセ族とエフライム族に与えられた土地ということで、それが丁度このあたりでした。

マナセとエフライムの領域の境目あたりにゲリジム山があり、その北に、旧約の時代にはシケムと呼ばれていた町

があります。これが新約においては「**スカル**」です。その近くに、「**ヤコブの井戸**」と呼ばれる「**泉**」があったのです。「**そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた。時はおよそ第六の時であった。**」と6節にあります。そこに、サマリアの女が水を汲みに来ました。旅に疲れ、喉が渇いていたイエス様は彼女に、「**わたしに水を飲ませてください**」と願ったのです。

11節には、この女性が「**主よ。あなたは汲む物を持っておられませんし、この井戸は深いのです。**」と言ったとあります。つまりこの「**泉**」は、汲むものがなければ水は手に入らないのです。彼女は水を汲みに来たのですから、それを持っています。だからイエス様は彼女に「**水を飲ませてください**」と頼んだのです。

イエス様がこのように願ったことから、イエス様と彼女との間に会話が始まり、二人の出会いが起りました。それは決して、たまたま偶然に起ったことではありません。イエス様は既に彼女のことを知っておられ、彼女を救いへと招くために、イエス様の方から声をかけ、出会って下さったのです。このようにイエス様はいろいろな仕方で、いろいろなきっかけを用いて私たちと出会い、招いて下さいます。サマリアの女性は、このような仕方でイエス様と出会い、招かれたのです。そこにおいては、最初はイエス様の方から、頼まれて何かをしてあげていたのが、どこかで、自分の方からイエス様の救いを求めるようになる、という逆転が起ります。イエス様から水を飲ませてくださいと頼まれたこの女性が、イエス様に水をくださいと求めるようになったのと同じようなことが、私たちにも起り、求めていなかった私たちがイエス様の救いを求めるようになるのです。

4. 二つの驚き

この女性が自分からイエス様に水を求めるようになったのは、いくつかの驚きが積み重なったことでした。その驚きはイエス様が彼女にもたらしめたものです。つまりこの逆転は、イエス様がその御業によって作り出しておられるのです。そもそもイエス様の方から「**水を飲ませてください**」と声をかけられたことは、彼女にとって大きな驚きでした。9節で彼女は、「**あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。**」と言っています。これは驚きを語っている言葉です。彼女はここで二つのことに驚いたのです。

① 声をかける

一つは、当時、ラビと呼ばれている律法の教師は、公の場で女性に声をかけることはしなかったからです。彼女は、イエス様と弟子たちの一行を、律法の教師が弟子と共に旅をしているのだと思ったのです。律法の教師は、自分が汚れを受けてしまうリスクのあることは一切しません。弟子たちだけが町へ買い物に行っているというのもそういうことだと彼女は思ったのです。そういう律法の教師が、女である自分に親しく声をかけ、水を飲ませてくださいなどと頼むなんて、普通は考えられないことです。彼女は先ずそのことに驚いたのです。

② 敵対者が頼む

そして第二の、より大きな驚きは、イエス様はユダヤ人であり、自分はサマリア人だということです。9節後半に「**ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。**」とあるように、ユダヤ人とサマリア人は当時、お互いに敵意を抱いており、口もきかないような関係でした。とにかくユダヤ人がサマリア人にもものを頼むなどというのはあり得ないことだったのです。

このようにイエス様の方から「**水を飲ませてください**」と声をかけられたことに彼女はとても驚いたのです。その驚きは彼女の中にイエス様についての一つの思いを芽生えさせたと言えるでしょう。それは、この人は自分が知っている律法の教師たちとは全く違う、という思いです。この人は、男と女を分け隔てる、今日の言葉で言えば差別の思いに捕われていない。またこの人は、ユダヤ人とサマリア人の間の、決して乗り越えることができないと思われる分厚い壁、お互いを隔てて住む世界を違うものとしている障壁をも、事もなげに乗り越えている。こんな人には今まで出会ったことがない。そういう思いを彼女は抱いたのだと思うのです。そのイエス様の姿に彼女は新鮮な驚きを感じたのです。

5. 生ける水

そして彼女のイエス様に対する驚きは、10 節の言葉によってさらに大きくなりました。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリアの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」という問いに対して、10 節でイエス様は「もしあなたが神の賜物を知り、また、水を飲ませてくださいとあなたに言っているのがだれなのかを知っていたら、あなたのほうからその人に求めていたでしょう。そして、その人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」と言われたのです。彼女にはイエス様のこの言葉の意味はさっぱり分からなかったでしょう。

そして 11～12 節で「主よ。あなたは汲む物を持っておられませんし、この井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れられるのでしょうか。あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を下さって、彼自身も、その子たちも家畜も、この井戸から飲みました。」と言ったのです。彼女は、イエス様が与えると言っておられる「生ける水」を、「泉」から湧き出る普通の水としてとらえています。だから、「あなたは汲む物を持っていないのにどうして私に水を与えることなどできるのですか」と言ったのです。しかしここで彼女は、イエス様の言葉に、「泉」から汲まれた普通の水を与えることは違う何かを感じ取っています。「あなたは、私たちの父ヤコブより偉いのでしょうか。」との言葉がそれを表しています。ユダヤ人と同じくサマリア人にとっても、ヤコブは自分たちの先祖です。ヤコブがこの井戸を与えてくれたというのは、自分たちが生きていく場としてこの地を与えてくれたことを意味しているのです。そのことを持ち出している彼女の言葉には、あなたも先祖ヤコブと同じように、水を与えるだけでなく、私たちが生きていく場を、言い換えれば私たちに命を与えて下さる方なのですか、という問いが込められています。つまり彼女は、イエス様の言葉に驚かされつつ、そこに自分たちを本当に生かしてくれる神の力と権威を、おぼろげながら感じ始めているのです。

イエス様はご自分から彼女に語りかけ、出会っていかれたことによって、イエス様に対する驚きをもたらし、それによってイエス様が与える「生ける水」を求める思いを少しずつ育てていかれたのです。その上で、あの 13～14 節の「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」とい御言葉を語ったのです。それを聞いた彼女は、15 節「主よ。私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」と願いました。このようにして、水を飲ませてくださいとイエス様から求められた彼女が、自分からイエス様に水を求める者へと変えられたのです。「その水を私に下さい」と自分に頼んできたこの方は、実は私たちを本当に「生ける水」を与えて下さる方なのかもしれない、と彼女は思い始めているのです。「主よ。」という呼び掛けがそのことを示しています。

イエス様は私たちと出会って下さり、語りかけて下さることによって、私たちの中にも、イエス様が与えて下さる「生ける水」、「永遠のいのちへの水」を求める思いを起し、与えて下さいます。それは私たちの内で「泉」となり、「永遠のいのちへの水」が湧き出るような水、つまりむしろ「泉」と言うべきものです。この「泉」は、イエス様ご自身です。イエス様ご自身が私たちの内に来て下さり、宿って下さることによって、「泉」となって下さるのです。「その水を私に下さい」と求めさえすれば、イエス様というかれることのない「泉」が私たちの内に宿って下さり、私たちを決して渴くことのない「生ける水」によって潤して下さるのです。

ヨハネの福音書 7 章 37～39 節に「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。」とあります。これは聖霊のことを言っていたのです。つまり、イエス様が与えられる「生ける水」とは、御霊と御言葉によって与えられる救いの恵みのことであり、これが与えられると、それまで求めても得られなかった本当の満足を得ることができるのです。それだけでなく、「泉」のように、「永遠のいのちへの水」が湧き出て来て、他の多くの人々を潤し、渴きを満たすことができるようになるのです。